

ブルガリア語の従属節の evidentiality

ヨフコバ四位 エレオノラ

はじめに

本稿ではブルガリア語の複文における従属節の evidentiality⁽¹⁾の形式的・意味的特徴について分析する。分析の焦点となるのは補語的従属節 (подчинително допълнително изречение) であるが、「伝聞」という機能 (2-2 章) を論じるに当たって、その他の種の複文にも触れる。本稿の分析の目的は次の問題である。まず、単文における述語を伴う evidential (-л 分詞) について筆者が指摘した⁽²⁾形式と意味の対応性が、複文の従属節のレベルにおいても同様に確認できるか、また確認できない場合は、それは如何なる要因と結び付けられるかという問題である。さらに、主節の述語のタイプまたは主節のモダリティのタイプが従属節の evidentiality には如何なる影響を及ぼすかについて分析する。

単文における述語を伴う -л 分詞の形式的・機能的分類については次のように提案した：複数ある -л 分詞の形式を、分詞のタイプ (Aorist 分詞と Imperfect 分詞)⁽³⁾と分詞を伴う繫辞⁽⁴⁾ (とりわけ、三人称の *e*, *ca*) または補助動詞 (*бул*) の有無によって、大きく四つのタイプ、すなわち「繫辞＋Aorist 分詞」(*e ходил*)、「繫辞＋Imperfect 分詞」(*e ходел*)、「無繫辞の Aorist / Imperfect 分詞」(*ходил/ходел*)、「補助動詞＋Aorist / Imperfect 分詞」(*бул ходил/ходел*) に分け、意味的・機能的特徴は、形式的特徴によって定められていると論じた。三人称の繫辞が残る Aorist 分詞は「パーフェクト」(いわゆる現在完了 *Влакът*

- 1 'evidentiality' は「証拠性」と訳されるが、本稿で敢えて訳語ではなく 'evidentiality / evidential' という用語を用いるのは次の要因のためである。一つは、'evidentiality / evidential' という用語が様々な文献での使用によって広く普及しており、指示の意味が明確である。また、'evidentiality' という用語は「情報源」('source of information') のみならず、「情報源」という概念の意味枠を越えた意味（「驚異」('admirativity/mirativity')）で用いられることもしばしばあるので、ブルガリア語の -л 分詞のような幅広い意味・機能ドメインの記述には、「証拠性」より適格であると思われる。
- 2 ヨフコバ四位・エレオノラ「ブルガリア語の / 分詞の語用論的研究：いわゆる Evidential のカテゴリーに関連して」東京大学大学院博士論文、2003；Eleonora Yovkova-Shii, "Evidentiality and Admirativity: Semantic-Functional Aspects of the Bulgarian /-participle" 『言語研究』第 126 号、2004 年、pp. 1-38.
- 3 これらの分詞はそれぞれ「完了過去」(минало свършено време) と不完了過去 (минало несвършено време) の語幹から派生するものであるが、日本語文献においては「定過去分詞」と「半過去分詞」と称されることが多い (cf. 『言語学大辞典 3』下 -1 三省堂、1992 年、837 頁；佐藤純一「ブルガリア語」『世界の言語ガイドブック 1』三省堂、1998 年、286 頁)。ただ、用語の日本語訳が未だ統一されておらず、混乱しやすいため、本稿では「Aorist 分詞」と「Imperfect 分詞」と呼ぶことにする。英語文献においても 'Aorist participle' 'Imperfect participle' という言い方が一般的である。
- 4 ブルガリア語の規範文法においては *e*, *ca* は「補助動詞」と称されるが、本稿では「繫辞」と呼ぶ。その理由は次のようである。まず、-л 分詞を伴うことがある *бул* 補助動詞と区別するためである。基本的に *e*, *ca* と *бул* の語源が同じ (*бъда*) であるが、*бул* が動詞の性質を保ち、独立して用いられるのに対し、*e*, *ca* が独立した形では用いられない。また、*e*, *ca* に後続する語が名詞か (形容詞的に使われ得る) 分詞であるので、*e*, *ca* は統語的にコピュラに近い性質をもっていると言える。

e пристигнал. 「電車が着いている」) または「結果状態・徴候の存在による推量」(*'Ti si plakala.'* 「あなた、泣いたみたいだね」) か完了した出来事への話者の「驚異」(*'Валяло e.'* 「雨が降ったんだ」) を表す。一方、三人称の繫辞が残る Imperfect 分詞は「伝聞に基づく推量」(*'Той много е тиел.'* 「彼はたくさん飲むらしい」) を表す。三人称の繫辞が省かれている *-л* 分詞の形式は、テンス的特徴によって「伝聞」(過去/現在: *'Ходил/Ходел често там.'* 「彼がよくそこへ行っていた/行くそうだ」) か出来事への「驚異」(現在: *'Тя свирела много хубаво на пиано.'* 「彼女はなんて巧くピアノが弾けるんだ」) を表す。また、「純伝聞」(*'pure report'*) はいつも無繫辞の形式によって表される。*бил* が付く形式は明示的に「不信」(*'Имал бил пари.'* 「彼にはお金があると言われる(が、私は信じない)」) を表す。

-л 分詞の形式の分類や機能の特徴を巡る研究は数多くあり、従来の研究では、単文と並んで複文の例も多数挙げられているが、複文のみに注目する研究は、筆者の知っている限りでは存在しない。本稿は、複文という観点から *evidentiality* の現象を追求し、*evidentiality* の研究が残している数々の問題の解決にさらなる視点を加えることを目指す。

本稿は、以下のような構成から成る。「はじめに」では、本稿の目的や動機を記し、また *-л* 分詞の形式のタイプとその機能を整理した。1 章では、ブルガリア語の複文のタイプを挙げる。本稿の本論である 2 章では、機能に準じて従属節の *evidentiality* を分析する。2-1 章では、「推量」という機能を取り上げ、従属節に *-л* 分詞以外の形式と *-л* 分詞の形式の双方が用いられる場合の「推量」の意味の成立について考察する。2-2 では、「伝聞」という機能を取り上げる。2-2-1 では、主節に「告知・引用」の動詞が用いられる複文を分析し、従属節の動詞の形の特徴を考察する。2-2-2 では、主節には「告知・引用」の動詞以外の動詞もしくは「伝聞」を明示する *-л* 分詞が用いられる複文について分析する。2-3 では、「推量」や「伝聞」、すなわち「証拠性」(情報源) を表さない *-л* 分詞の複文を取り上げる。3 章では *-л* 分詞と *'knowledge'* と *'belief'* という概念の関係について探る。「おわりに」では、本稿の分析の結果をまとめる。

1. ブルガリア語の複文のタイプ

主節と従属節の関係によってブルガリア語の複文は二種に分かれている。一つは並列構造をもつ複文 (*сложно съчинено изречение*)、もう一つは従属構造をもつ複文 (*сложно съставно изречение*) である。後者はさらに、主節に対する従属節の統語的働きによって、五類、すなわち 1) 修飾節⁽⁵⁾をもつ複文 (*определително*)、2) 補語節をもつ複文 (*допълнително*)、3) 副詞節⁽⁶⁾をもつ複文 (*обстоятелствено*)、4) 主語節をもつ複文 (*подложно*)、

5 従属節が修飾する語の統語的役割によって、修飾は主語修飾、補語修飾、述語的補語修飾というタイプがある。

6 副詞は 10 種類 (1)時間、2)場所、3)手段と比較、4)理由、5)目的、6)度合い、7)条件、8)譲歩、9)除外、10)結果) に分類されている。副詞節もそれによって 10 種類に分類されている。分類の詳細が本稿の目的に直接関係していないため、分類を列挙しておくにとどめたい。

5) 述語の補語的節をもつ複文 (сказуемноопределително) というタイプに分類される⁽⁷⁾。それぞれのタイプの例は以下の(1)～(6)である⁽⁸⁾。

- (1) *Срещнах Иван, когато не бях виждал цяла година.* (修飾節) (Пашов:1994 による例)
一年も会っていないイヴァンに会った。
- (2) *Вярвам, че е заминал.*⁽⁹⁾ (че 接続による補語節)
彼が出発したことを信じる。
- (3) *Вярвам, да е заминал.*⁽¹⁰⁾ (да 接続による補語節)
彼が出発したと信じる。
- (4) *Когато му попадне вестник в ръката, прочита го от край до край.* (時間的副詞節)
(Пашов:1994 による例)
彼は、新聞が手に入ると、隅から隅まで読んでしまう。
- (5) *Който дойдеше, най-напред питаше за него.* (主語節) (Пашов:1994 による例)
来る人は皆、彼のことを聞いていた。
- (6) *Животът не е какъвто беше едно време.* (述語の補語的節) (Пашов:1994 による例)
今の生活は、昔のと違う。

本稿では、主に補語的従属節をもつ複文を扱うので、このタイプの文の節の接続について少し触れておきたい。上記の(2)、(3)が示しているように、補語的節は接続の際、二つの接続語 (че, да) を取り得る。これらの接続語は、機能も意味も異なる。接続語の選択は動詞の意味に依存する。ある動詞 (спомням си 「思い出す」、обяснявам 「説明する」) は、че のみと共起する。また、ある動詞 (искам 「ほしい」、моля 「お願いする」、принуждавам 「させる」) は да のみと共起する。また、да 接続の場合は、да に次ぐ動詞が現在形 (または現在性という意味特徴を含んでいる形式) でないといけないという制約

7 Пашов П. Практическа българска граматика. София, 1994. С. 386-410; Бояджиев Т., Куцаров И., Пенчев Й. Съвременен български език. София, 1998. С. 569-595.

8 補語的従属節をもつ複文の例は二つ挙げている。それは二種の接続語 (че, да) があり、接続語によって意味変化が生じるためである。

9 出典のない用例は筆者の作例である。

10 ブルガリア語における че と да による接続は、日本語の「～と V」と「～こと／の V」との類似がある。日本語の「と」節と「こと／の」節の違いについて、久野暉 (『日本文法研究』大修館書店、1973年、137頁) が次のように述べている: 「「こと／の」で終わる名詞節は、その節が表す動作、状態、出来事が真であるという話者の前提を含んでいるが、「と」で終わる名詞節には、そのような前提が含まれていない」。しかし、久野は何故「と」が「知る」という動詞を伴うことができるかという理由が明らかではないと述べている。この理由は N. Akatsuka, "Conditionals and the Epistemic Scale," *Language* 61:3 (1985), p. 631 によって説明されている。че / да と「と／こと」の間、類似があると言っても、全く同じというわけではない。

がある。一方、どちらとも共起できる動詞もあるが、その場合、接続語によって意味に相違が生じる (*Мисля, че пея* 「歌っていると思う」、*Мисля да пея* 「歌おうと思っている」)。

ここで、*да* の性質に少し触れておきたい。

まず、*да* には様々な文法的働き、すなわち動詞と動詞を繋ぐ働き (*започвам да чета* 「読み始める」、*искам да ходя* 「行きたい」、*каза да дойде* 「来るように言った」、*мога да кажа* 「言うことができる」など) や主節と従属節を接続する働き (*Искам повече време да мога да се занимавам с любимите си неща* 「好きなことがやれるように、もっと時間がほしい」) や単文の述語を伴う働き (*Да сте живи и здрави* 「元気でいてください」、*Ти да мълчиш* 「黙って」) がある。動詞と動詞を繋ぐ場合と、単文の述語を伴う場合の *да* は助詞として分類され、節と節を結ぶ場合の *да* は接続詞として分類されることが多いが、*да* の品詞上の分類や名称は研究によって異なり、未だに統一された分類は存在しない。*да* の品詞上の分類は、本稿の分析にはさほど重要ではないためここでは「接続語」と称することにする。

次に、*да* と *че* の意味の違いを簡単に取り上げておきたい。

一般に *че* の方がモダリティ性の度合いが低いと言われる⁽¹¹⁾。言い換えれば、日本語の「こと／の」と同様に、*че* に後続する節は現実の（「真であるという話者の前提を含んでいる」）出来事を表す。一方、*да* に関しては、非モーダルな働きとモーダルな働きが指摘される⁽¹²⁾。非モーダルな働きとはいわば英語の *to*-infinitive のようなものに当たる不定詞 (infinitive) である⁽¹³⁾。*да* のモーダルな働き（話者の意志・意向）としては、不定詞の一部 (*мисля да ходя* 「行こうと思っている」、*каза му да дойде* 「彼に来るように彼が言った」) や単文の述語として使用される場合の「話者の意志・意向」という働き (*Да дойде* 「彼が来るように」) が指摘され、これらの働きをもとにブルガリア語には従属ムード（‘конюнктив’）があると主張されることもある⁽¹⁴⁾。ブルガリア語に従属ムードがあるか否かという議論は本研究の目的ではないため、ここではこの議論には踏み込まない。しかし、*да* のモーダルな働きは本稿の分析に関わるため、以下の分析の際に、*да* 接続の例も挙げる。

11 *Пашов*. Практическа. С. 394; *Бояджиев и др.* Съвременен. С. 573-574.

12 *Пашов*. Практическа. С. 394; *Бояджиев и др.* Съвременен. С. 575-576; *Маслов Ю.С.* К вопросу о системе форм пересказывательного наклонения // Сборник в чест на Александър Теодоров-Балан. София, 1956. С. 318; *Маслов Ю.С.* К семантике болгарского конъюнктива // Ученые записки ЛГУ. 1962. № 316. С. 3-10; *Демина Е.И.* Пересказывательные формы в современном болгарском литературном языке // Вопросы грамматики болгарского литературного языка. М., 1959. С. 328-331; *H. Aronson*, “Interrelationships between Aspect and Mood in Bulgarian,” *Folia Slavica* 1:1 (1977), pp. 17-21.

13 非モーダルな働きの範囲を巡る見解は研究によって異なる。たとえば、*Маслов* (К семантике. С. 4-5) が非モーダルな働きとして指摘する *мога да кажа* 「言うことができる」は、*Aronson* (“Interrelationships,” p. 18) の見解ではモーダルとされる（‘the infinitival conjunctive is clearly nonreal’）。

14 ブルガリア語には ‘конюнктив’ があるということを主張するのは *G. Weigand*, *Bulgarische Grammatik* (Leipzig, 1907), p. 97; *Маслов* (К вопросу. С. 318; К семантике. С. 3-10) であるが、多くのブルガリア人研究者 (*Балан А.Т.* Състояние на българската граматика. София, 1947. С. 114; *Андрейчин Л.* Основна българска граматика. София, 1944. С. 158.) がこの見解に反対する。

2. 従属節の evidentiality

2-1. 推量

まず、推量という機能についてみてみたい。先行研究では、筆者が *-л* 分詞の機能の分類の際、二種の推量を区別し、一つは「結果状態・微候の存在による推量」、もう一つは「伝聞に基づく推量」と指摘した⁽¹⁵⁾。前者は三人称の繫辞が残る Aorist 分詞によって表され、また同形式はパーフェクト（現在完了）および完了した事象への驚異も表し得ると論じた。一方、後者は、三人称の繫辞が残る Imperfect 分詞によって表されると主張した。

従属節の「推量」の形式的・意味の特徴を追求するに当たって、主節に推量の意味を表す動詞がある複文の振る舞いに焦点を当て分析していく。推量を表す動詞として *предполагам, изглежда, струва ми се, види се, оказва се, излиза*⁽¹⁶⁾ を取り上げる。まず、これらの動詞の意味特徴を少し記述しておきたい。

предполагам 「推測する、～と思う」は話者の主観的判断を表している。*изглежда* 「そう見える」、*струва ми се* 「～と思う」は状況（結果状態・微候の存在または第三者の発言）による話者の推量を表している。*види се, оказва се, излиза* 「～が明確だ／～が分かった」は様態・比況または話者の気づきを表している⁽¹⁷⁾。

2-1-1. *-л* 分詞以外の形式

従属節に *-л* 分詞以外の形式のある文からみていきたい。ここでは基本的テンス（現在、過去、未来）のみを扱う⁽¹⁸⁾。また、*че* と *да* の両方の接続語との共起の可能性を追求する。

まず、現在形の例から始めたい。現在形が眼前の出来事、すなわち話者が目撃し、「真」を立証できる出来事を表している場合は、推量動詞との共起の際に不自然さが生じる(7)。

(7) *a. *Предполагам*/b.**Изглежда*/**Струва ми се*/c.**Излиза*/**Оказва се*/d.**Види се, че*
чете.⁽¹⁹⁾

a. 彼 (/彼女) が読んでいると思う。/ b. 彼 (/彼女) が読んでいるようだ / c. 彼 (/彼女) が読んでいるんだ / d. 彼 (/彼女) が読んでいるのが明らかだ

15 ヨフコバ四位「ブルガリア語の *л* 分詞の語用論的研究」83 頁: Yovkova-Shii, “Evidentiality and Admirativity,” p. 104.

16 これらの動詞による推量の意味は同類ではない。

17 *види се* は多義的であり、文脈によって *изглежда* の意味（「～のようである」）または確言の意味を表し得る。また、*струва ми се* は、*предполагам* の意味で用いられる場合がある。

18 ブルガリア語には九つのテンス（現在 (сегашно време)、完了過去 / 定過去 (минало свършено време)、不完了過去 (минало несвършено време)、不定過去 / 現在完了 (минало неопределено време)、過去完了 (минало предварително време)、未来 (бъдеще време)、過去未来 (бъдеще време в миналото)、未来完了 (бъдеще предварително време)、過去未来完了 (бъдеще предварително време в миналото)) があるが、基本的テンス以外のいわゆる相対的テンスは、テンス的な特徴にアスペクト的な特徴 (完了 / 不完了) を重ねるものである。テンスのアスペクト的な特徴に基づく違いが本稿の分析の結果には影響を与えないため、相対的テンスは分析の対象から除外する。

19 「*」は意味的不自然さまたは非文法性を指す。

一方、話者が出来事を目撃しているにもかかわらず、動作主の動作・状態を確認できないもしくは確実に知り得ない場合(8)、または出来事の成り行きが、話者が思っていたこととは異なる場合(9)に、現在形と推量動詞の共起は可能である。

(8) *A: Какво прави Иван.*

イヴァンは今何をしていますか。

B: Струва ми се, че чете.

読んでいるようだ。

(9) *Аз мислех, че Иван вече е излязъл, а то се оказва, че той чете в стаята си.*⁽²⁰⁾

イヴァンがもう出かけているかと思っていたら、なんと部屋で読んでいるんだ。

また、話者が出来事を確認していない（あるいは確認できない）という条件が満たされれば、通常の出来事を表している現在形(10)または状態動詞（*бъда*）の現在形(11)も推量動詞と共起し、話者の主観的態度を表すことができる。

(10) a. *Изглежда/б. Види се/с. Предполагам, че чете много.*

a. 彼（/彼女）はたくさん読むようだ（/らしい）。/ b. 彼（/彼女）がたくさん読むのが明らかだ。/ c. 彼（/彼女）はたくさん読むと思う。

(11) a. *Изглежда/Струва ми се/б. Излиза/Оказва се/с. Предполагам, че е тук.*⁽²¹⁾

a. 彼（/彼女）はここにいるようだ。/ b. 彼（/彼女）はここにいるんだ。/ c. 彼（/彼女）はここにいると思う。

一方、*да* が用いられた場合は、非文法的文が生成される。

(12) **Предполагам/*Изглежда/*Струва ми се/*Излиза/*Оказва се/*Види се да чете.*

(12)の非文法性は、主節の動詞が表している「推し量り」という意味と *да чете* が表している「意志・意向」という意味の間に矛盾が生じることによるものである。

次に、主節の推量動詞と完了過去/定過去形 (Aorist)⁽²²⁾の共起を検討したい。規範文法書ではこの過去形は *минало свършено/определено време* と称され、「話者が目撃した、ある過去の時点において完結した出来事」を表しているとされる。一方、Aronson⁽²³⁾や

20 この文には「驚異」の意味がある。-л 分詞によって表される「驚異」との違いについて 2-1-2 で述べている。

21 この例の *е тук* は話者がまだ目撃していない出来事（「彼/彼女が来てここにいること」）を表している。*Изглежда/Струва ми се, че е тук* は「徴候の存在による推量」、*Излиза/Оказва се, че е тук* は話者の気付き、また *Предполагам, че е тук* は話者の主観的判断を表している。

22 以下アオリストと呼ぶ。

23 H. Aronson, "The Grammatical Categories of the Indicative in the Contemporary Bulgarian Literary Language," in *To Honor Roman Jakobson 1* (The Hague: Mouton, 1967), p. 87.

Friedman⁽²⁴⁾は、この形式の基本的意味（‘invariant meaning’）として「話者の確定」（‘speaker’s confirmation’）という特徴を指摘し、‘the definite past specifies the speaker’s personal confirmation of the truth of the statement’ と述べている⁽²⁵⁾。アオリストが話者の確定を表しているのであれば、話者の不確定を表す推量動詞との共起は不可であると予測されるが、(13)が示しているように、*изглежда, струва ми се* との共起は可能である。

- (13) *Изглежда/Струва ми се/*Излиза/*Оказва се, че дойде. Вратата се хлопна.*
彼 / 彼女が来たようだ。ドアの音がした。

本稿では、アオリストの ‘invariant meaning’ として「完結性」を主張し、また完結した動作・状態を話者が目撃してもしなくてもよいと考える。話者が目撃しない完結した出来事を知らせる徴候（結果状態）が存在すれば、アオリストと *изглежда, струва ми се* の共起は可能である(13)。一方、*излиза, оказва се* との共起は不可である。不共起の理由は次のようである。*излиза, оказва се* が話者の気付きを表しているため、発話時には出来事が継続するまたは出来事の結果状態が残っているという条件が満たされなければならないが、アオリストの用法はこの条件を満たしていない。この条件を満たしているが故に、現在形（すでに取り上げた）と現在完了（／不定過去）形（以下の -л 分詞の用法の分析の際に取り上げる）は *излиза, оказва се* と共起できる。

アオリストが表している出来事は必ずしも話者が目撃した出来事でなくてもよいということに関しては Aronson⁽²⁶⁾ や Friedman⁽²⁷⁾ も指摘し、また Станков⁽²⁸⁾ の次の例はそれを裏付けている。

- (14) *Кой така лошо ти уиш яката на палтото.*⁽²⁹⁾
誰があなたのコートの襟をこんな下手に縫ったか。

現在形と同様に、従属節の接続語には *да* が用いられた場合は、非文法的文が生じる。

- (15) **Изглежда/*Струва ми се/*Излиза/*Оказва се да дойде.*⁽³⁰⁾

24 V. Friedman, “Admirativity and Confirmativity,” *Zeitschrift für Balkanologie* 17:1 (1981), p. 13; V. Friedman, “Evidentiality in the Balkans: Macedonian, Bulgarian, and Albanian,” in W. Chafe, J. Nichols, eds., *Evidentiality: The Linguistic Coding of Epistemology* (Norwood, N.J.: Ablex, 1986), p. 171.

25 Friedman, “Evidentiality in the Balkans,” p. 171.

26 Aronson. “The Grammatical Categories,” p. 87.

27 V. Friedman, *The Grammatical Categories of the Macedonian Indicative* (Columbus: Slavica, 1977), pp. 39-40; Friedman, “Evidentiality in the Balkans,” p. 171; V. Friedman, “The Category of Evidentiality in the Balkans and the Caucasus,” in A.M. Schenker, ed., *American Contributions to the Tenth International Congress of Slavists* (Columbus: Slavica, 1988), p. 122.

28 Станков В. Категории на индикатива в съвременния български език // препечатено в Паишев П., Ницолова Р. (ред.) Помагало по българска морфология. Глагол. София, 1976. С. 360.

29 “*уиш*” という動作は話者が目撃していない。

30 アオリストの形態と現在の形態が一致する動詞があり、*дойде* がその一つである。その区別はストレス (*doiðe*[アオリスト]、*doiðe*[現在]) または文脈によってなされる。

最後に、従属節に未来形の動詞がある文を検討したい。Янакиев⁽³¹⁾、Gołąb⁽³²⁾、Aronson⁽³³⁾は、未来の形式をモダリティの形式、すなわち非直説法 (non-indicative) の形式として分類する。このような分類を否定する研究も少なくない⁽³⁴⁾が、どの研究も未来形のモーダルな用法を認めている。

接続語に *че* が用いられると、未来形は推量動詞と共起できる。

- (16) *Изглежда/Струва ми се/Види се/Излиза/Оказва се, че ще ходи.*
彼 / 彼女は行くようだ。

これは、未来形には未確認の意味が含まれているためである。*изглежда, струва ми се, види се* の場合は、意味は状況による推量または話者の主観的判断である。一方、*излиза* と *оказва се* の文は、話者が発話時において初めて、動作主が未来において行おうとする行為に気付く (この場合の話者の気付きを導いているのは「第三者の発言」と考えられる) ということを表している。

現在形とアオリストと同様に、*да* による接続は不可である。

- (17) **Изглежда/*Струва ми се/*Види се/*Излиза/*Оказва се да ще ходи.*⁽³⁵⁾

ここまでの考察から明らかになったように、*че* 接続語が用いられた場合は、どのテンス形式も推量動詞の節と共起できる。一方、接続語を *да* に置き換えると、全てのテンスにおいて非文法的文が生成される。

2-1-2. -л 分詞

次に、従属節に *-л* 分詞の形式が用いられた場合に、如何なる形式的特徴が現れ、またすでに取り上げた他のテンス、特にアオリストと如何なる意味の違いが生み出されるかを検討したい。

すでに述べたように、推量を表すに当たって、三人称の繫辞が保持される Aorist 分詞 (「結果状態による推量」) と三人称の繫辞が保持される Imperfect 分詞 (「伝聞に基づく推量」) の形式が用いられるが、前者は多義的であり、推量以外に、「現在完了」(パーフェクト) および「驚異」という意味も表す。ただ、この多義性は文脈において解決され、機能の重複 (overlap) はほとんど起きない。

31 Янакиев М. За грамемите наричани в българската граматика «сегашно време» и «бъдеще време» // Известия на института за български език. 1962. № 8. С. 27.

32 Z. Gołąb, "The Problem of Verbal Mood in Slavic Languages," *International Journal of Slavic Linguistics and Poetics* 8 (1964), p. 17.

33 Aronson, "Interrelationships," p. 16.

34 伝統文法書や Герджиков Г. Преизказването на глаголното действие в българския език. София, 1984. С. 8. など。

35 ただ、*да* と *ще* の位置を変えれば、次のように、推量を表す文法的文が発する：*Изглежда ще да ходи*。 *Ще да* の意味と機能に関する詳しい記述は、Герджиков. Преизказването. С. 121-153 にある。

従属節に *-л* 分詞を含んでいる複文の分析は、Aorist 分詞の用法から始めたい。まず、次の例を見られたい。

(18) a. *Изглежда/Струва ми се/Види се*/b. *Предполагам/с. Излиза/Оказва се, че е чел тази книга.*

- a. 彼 (/彼女) はこの本を読んだようだ。 / b. 彼 (/彼女) がこの本を読んだと思う。
c. 彼 (/彼女) はこの本を読んだんだ / 彼 (/彼女) がこの本を読んだと分かった。

(19) *Изглежда/Струва ми се/?Види се*⁽³⁶⁾ / **Предполагам/*Излиза/*Оказва се да е чел тази книга.*

従属節が *че* 接続語によって接続される場合は、全部の推量動詞と Aorist 分詞の共起が可能である。一方、節が *да* によって接続される場合は、*изглежда* と *струва ми се* しか用いられず (場合によっては *види се* も)、『*че да е чел*』と同じ意味を帯びる。

(18) と (19) の用法を比べると、意味は同じであるが、(19) は (18) より話者の確信 (certainty) の度合いが少し低い。

では、*-л* 分詞の従属節とアオリストの従属節の複文はどう違うか。*че* 接続語が用いられる次の文を比較してみよう。

(20) *Изглежда, че някой е влизал в къщата.*
誰かが家に入っていたようだ。

(21) *Изглежда, че някой влезе в къщата.*
誰かが家に入ったようだ。

(20) は、話者が結果状態しか知り得ず、動作そのものは知らない (目撃していない) という前提がある。すなわち「誰かが家に入った」時、話者は家にはいなかったのである。そして、話者が知っているのは、動作の結果として残された状態 (「家のドアが空いていること」、「家が荒らされていること」など) のみである。一方、(21) は、動作が行われた時に、話者は家にいたという前提がある。そうして、話者は何らかの徴候 (ドアの音など) をもとに、目撃していない出来事を推定する。

これらの違いをもとに考えれば、複文の従属節に現れる Aorist 分詞は、モダリティより⁽³⁷⁾、アスペクト性 (結果状態、パーフェクト) を表していると言える。また、推量を表す複文の従属節に用いられる Aorist 分詞は、単文の推量の *-л* 分詞と同様に、繫辞を保つ。次の (22) のような文は非文法的文である。

(22) **Изглежда, че някой влизал в къщата.*

36 *види се* は *изглежда* の意味解釈がある場合は、用法が可能である。

37 モダリティは、主文の動詞、すなわち推量の動詞が担っている。

次に、Aorist 分詞以外の -л 分詞の形式は推量動詞と共起できるか、またできるのであれば如何なる意味のニュアンスを生み出すかをみてみたい。

- (23) *Изглежда учителят не е знаел, че нашите възглавници са пълнени с тиеничена слама.* (Й. Радичков)⁽³⁸⁾
私たちの枕に小麦の藁が詰めてあったとは先生は知らなかったらしい。

(23) の -л 分詞は Imperfect 分詞である。三人称の繫辞が残る Imperfect 分詞に関しては、伝聞をもとになされる推量という機能を主張した⁽³⁹⁾。また、2. 1 で述べたように、*изглежда* が表す推量の意味が二つの要因によって特徴付けられ、一つは結果状態・徴候の存在、もう一つは第三者の発言（伝聞）である。(23) の *изглежда* は、後者の解釈を帯び、文全体は「過去の事柄に対する伝聞をもとになされる話者の推量」という意味合いを帯びている。その意味が引き出されるのは従属節の Imperfect 分詞の働きによる。

次の例(24)も、話者の、第三者の情報をもとにした推定を表している。

- (24) *Такива чувства са блуждаели, види се, в паметта му, забулена от съня.*⁽⁴⁰⁾ (Е. Станев)
眠りで覆われた彼の記憶をこんな気持ちさがさまよっていたようだ。

主節に *излиза* か *оказва се* という動詞が用いられると、分詞は「驚異」を表す。

- (25) *Излиза, че той е можел да свири, но си е мълчал.* (Герджиков : 1977⁽⁴¹⁾による例)
彼は黙っていたのだが、なんと楽器が弾けるのだった。
- (26) *Оказва се, че той е щял да прекара лятото тук.* (Герджиков : 1977による例)
彼は、なんと夏休みをここで過ごす気だった。

(25)、(26) の分詞の繫辞が脱落しても、「驚異」の意味は変わらない：

- (25') *Излиза, че той можел да свири, но си е мълчал.*

- (26') *Оказва се, че той щял да прекара лятото тук.*

38 Герджиков. Преизказването. С. 21にて引用。

39 ヨフコバ四位「ブルガリア語のI分詞の語用論的研究」；Yovkova-Shii, “Evidentiality and Admirability.”

40 Герджиков. Преизказването. С. 21にて引用。この文においては、主節 (*види се*) と従属節 (*са блуждаели*) の位置が入れ替わっている。標準的語順は次の通りである：*Види се, че такива чувства са блуждаели в паметта му, забулена от съня.*

41 Герджиков Г. Една специфична глаголна категория в съвременния български книжовен език // Годишник на Софийския университет. 1977. № 69:2. С. 23.

単文における「驚異」を表す *-л* 分詞の形式的特徴について、筆者は以前の研究⁽⁴²⁾において次のように述べた：完了した出来事に対し、「驚異」の意を与える非瞬間動詞 (non-punctual verb) の *-л* 分詞は通常繫辞を残す。一方、不完了の出来事、すなわち発話時において行われている (話者が目撃し得る) 出来事に対し、「驚異」の意を与える *-л* 分詞の述語においては繫辞が脱落する。一方、Герджиков⁽⁴³⁾が、繫辞の有無は任意的であると主張する。複文に関しては Герджиков の主張する任意性を認めてもよいと思われる。

上記の (25)、(26) の従属節の分詞の時制はそれぞれ現在と未来である。これらの文の *-л* 分詞の形式を通常の時制形、すなわち現在形と未来形に置き換えてもよいが、多少の意味変化が生じる：

(27) *Излиза, че той може да свири, но си мълчи.*

(28) *Оказва се, че той ще прекара лятото тук.*

(27)、(28) と (25)、(26) の違いは次のようである：まず、(27)、(28) より (25)、(26) の方が主観性の度合いが高い。また、非 *-л* 分詞の形式は、発話時における話者の気付きのみを表しているが、*-л* 分詞は、発話時における話者の気付きを表しながら、その気付きを発話時以前の話者の何らかの「期待」(expectations) または「思い込み」(assumptions)⁽⁴⁴⁾ と対比させている。

推量動詞の主節を伴う従属節には *бил* 補助動詞が付加する *-л* 分詞も現れ得るが、その意味は二通りである：一つ (29) は、出来事の「過去性」である。すなわち出来事のテンス的特徴を明示するのである。

(29) *Оказва се, че той се е бил прибрал(<се беше прибрал) много преди тях.*

彼は彼らよりずっと前に帰っていたようだ。

もう一つ (30) は、「不信」という別なモーダルな意味を加えるものである：

(30) *Оказва се, че той е бил можел да свири на пиано, а ние не му вярваме/вярвахме.*

私たちは信じていない (/ 信じていなかった) が、彼はなんとピアノが弾けるんだ。

2-2. 伝聞

ブルガリア語の evidentiality が議論される際に最も注目される機能は「伝聞」⁽⁴⁵⁾ である。

42 ヨフコバ四位「ブルガリア語の *l* 分詞の語用論的研究」173-174 頁；Yovkova-Shii, “Evidentiality and Admirativity,” p. 30.

43 Герджиков. Прензказването. С. 111.

44 たとえば、(25)「彼が弾けないと思っていたこと」または(26)「彼がここではなく他の場所で夏を過ごすと思っていたこと」

45 「間説法」という用語もしばしば用いられ、「ある事態について、自分は直接知らないが、他からこう伝え聞いたという (他の人が言った、あるいは言っている) ことを相手に伝える」ということ表す文法的手段である。

なぜなら、ブルガリア語に関してはこの機能をなす専用のムード (*преизказно наклонение*) のパラダイムが存在すると一般に指摘されるためである。また、「伝聞のムード」の形式的特徴としては、三人称の繫辞の脱落が指摘される。しかし、繫辞の脱落は必ずしも「伝聞」を意味するとは限らない。無繫辞の形式には「伝聞」以外の働き（「驚異」など）がある⁽⁴⁶⁾。本稿の筆者は、無繫辞の形式の多義性は認めている一方、「純伝聞」(narrative など) が、常に三人称では無繫辞の形式によって表されると主張した⁽⁴⁷⁾。単文の「伝聞」を巡るこれらの指摘が、複文レベルにおいて如何なる程度保たれているかを検討するのがこの章の目的である。Yovkova-Shii⁽⁴⁸⁾では、複文の主節に「告知／引用」の動詞がある場合は、従属節の伝聞の evidential が繫辞を省いてもよいし、残してもよいと触れた。以下の分析を通じて、「伝聞」を表す複文の -л 分詞の繫辞の有無の現象について検討する。主節に「告知・引用」の動詞がある複文と、主節に「告知・引用」の動詞の代わりに「伝聞」を明示する -л 分詞がある複文の双方について分析する。

2-2-1. 主節に「告知・引用」の動詞がある複文

まず、主節の動詞が「告知・引用」の動詞 (*казвам/кажа* 「言う」、*твърдя* 「主張する」、*разправям/разправя* 「言う」、*съобщавам/съобща*⁽⁴⁹⁾ 「伝える、報告する、知らせる」) である場合の複文の分析から始めたい。

単文の「伝聞」を表す -л 分詞のテンスは、テンスが助詞の *ще* によって明示される未来形を除いて、分詞のタイプによって区別される。過去の出来事の「伝聞」は Aorist 分詞によって表される。一方、Imperfect 分詞は、不完了の過去の出来事の「伝聞」または現在の出来事の「伝聞」を表す。

主節に「告知・引用」の動詞がある複文の従属節には様々なテンスの形式が用いられ、これらの形式は「伝聞」の対象である出来事のテンス的特徴を表している。

(31) *Казват, че пееш много хубаво.* (現在形)

あなたは歌が上手だと言われる。

(32) *Казва, че ще ходи на море.* (未来形)

彼は海へ行くと言う。

46 Cf. Friedman, “Admirativity and Confirmativity,” pp. 16-17; V. Friedman, “Reportedness in Bulgarian: Category or Stylistic Variant,” *International Journal of Slavic Linguistics and Poetics* 25-26 (1982), pp. 152-153; Friedman, “The Category of Evidentiality,” p. 126; V. Friedman, “Confirmative/nonconfirmative in Balkan Slavic, Balkan Romance and Albanian with Additional Observation on Turkish, Romani, Georgian, and Lak,” in L. Johanson and B. Utas, eds., *Evidentials in Turkic, Iranian, and Neighbouring Languages* (Berlin: Mouton de Gruyter, 2000), pp. 334-336; ヨフコバ四位「ブルガリア語の l 分詞の語用論的研究」125 頁; Yovkova-Shii, “Evidentiality and Admirativity,” p. 23.

47 ヨフコバ四位「ブルガリア語の l 分詞の語用論的研究」142 頁; Yovkova-Shii, “Evidentiality and Admirativity,” p. 24.

48 Yovkova-Shii, “Evidentiality and Admirativity,” p. 24.

49 完了体／不完了体のペアである。

- (33) *Казва, че Иван дойде.* (定過去形)
 イヴァンが来たと彼は言った。

次に、上記の文における従属節のそれぞれの動詞の形を *-л* 分詞に置き換え、如何なる意味変化が生じるかを検討したい。

- (31') *Казват, че си пее много хубаво.*

- (32') *Казва, че цял да ходи на море.*

- (33') *Казва, че Иван (е) дошъл.*

(31~33)は、話者が伝えていることの情報源が話者以外のところにあるということのみを表しているが、(31'~33')は、話者が伝えていることの情報源が話者以外のところにあるということと同時に、話者は複文の事象の真偽判断に関与していない(場合によって疑っている)、すなわち真偽判断に関する責任の度合いが低いということも表している。

単文の「純伝聞」に関しては、三人称では繫辞が通常省かれると主張したが、(33')が示しているように複文の従属節には繫辞が残ることもある。本稿の筆者が調べた文学作品の例の中、有繫辞 (cf. 36、37) と無繫辞 (cf. 34、35) の双方の形式が使われていることが判明した⁽⁵⁰⁾。複文の主節に「伝聞」を明示する動詞(「告知・引用の動詞」)が用いられると、従属節の *-л* 分詞の三人称の繫辞の有無が任意的と思われる(母語話者の発話には一貫性が見当たらないため)が、繫辞の有無には識別役割がある場合も考えられる。その識別役割とは、出来事のテンス(過去か現在)の明示ということである。分詞の形のみからは、出来事の生起が過去か現在かわからない場合があり⁽⁵¹⁾、繫辞の有無が区別の手助けとなる。繫辞が省かれる形式は出来事の現在性(通常性)を指し示し(34)、繫辞が残る形式は、過去性または結果状態(パーフェクト: 36、37)を指し示す。

50 本稿の例の収集に当たって、主に母語話者の会話及び文学作品に注目しているので、出典はジャンルのバラエティに多少欠けていると思われる。繫辞の有無に不規則性が見られるというのは否定できない事実であるが、出版物(文学、マスコミ)における単文の「純伝聞」においては、規則的に繫辞が省かれる。一方、会話レベルにおいてはこの規則性は多少乱れる。繫辞の有無を巡る個人差(乱れ)に関して、Friedman, “Evidentiality in the Balkans,” p. 176; G. Fielder, “Distance as a Prototypical Verbal Category in Bulgarian,” *Balkanistica* 9 (1996), p. 219 でも指摘される。筆者の考えでは、「会話」というジャンルにおける有繫辞の形式(「推量」)と無繫辞の形式(「伝聞」)の用法にはある程度の任意性があると思われる。すなわち、発話時において、出来事を「推量」(「伝聞による推量」も含めて)として伝えるべきか、若しくは「伝聞」として伝えるべきかの選択が、その区別が文脈などによって綿密に求められていない場合には、話者の判断に任せられていると考えられる。同様のことは日本語に関しても指摘できる。すなわち、会話における「ようだ」と「らしい」、または「らしい」と「そうだ」の使い分けは、発話主の意図が決定することが多いと見られる。

51 不完了体の多くの動詞の Aorist 分詞と Imperfect 分詞の形(単数の2人称と3人称を除いて)は同じである。

(34) *Наистина всички казват, че докторът искал(<иска) много пари, но човек като му се помолил, може и с по-малко да мине.* (E. Пелин)⁽⁵²⁾

医者がお金をたくさんとるとみんなが言っている。しかし、お願いすれば、少し安くしてくれることもあるそうだ。

(35) *Казат, че и хляба им цели да пека на фурна.* (C. Даскалов)⁽⁵³⁾
彼らのパンもオーブンで焼くと言われる。

(36) *Хората ѝ казваха, че е отслабнала(<отслабна).* (E. Пелин)⁽⁵⁴⁾
人々は、彼女にやせたと言っていました。

(37) *Вестниците съобщиха, че някои депутати са разкритикували(<разкритикуваха) правителството.* (Герджиков : 1977 による例)
新聞は、何人かの議員が政府の批判をしたと伝えた。

しかし、分詞が過去の出来事を表しているにも関わらず、繫辞が省かれる場合も多数ある。

(38) *Вечер Лукан ни разправяше дълги приказки за бедни момци, които се женили(<жениха) за царски дъщери с помощта на вещици, на чудеса, на врани и на лисици* (E. Пелин)⁽⁵⁵⁾

夜になると、ルカンは貧乏な少年達について長い話をしてくれました。その少年達は、魔女や不思議、カラスやキツネの力を借りて女王たちと結婚したりしたそうです。

(39) *Моят братанец разправя, като бил войник, разболял се(<разболя се) и го занели(<затесоха) в болницата.* (E. Пелин)⁽⁵⁶⁾

兄は次のように語っていました。徴兵のとき、病気になり、病院へ運ばれたそうです。

複文の従属節の分詞の繫辞の有無に関しては、個人差があると考えられる (cf. 注 50) が、(38)、(39) のような文の繫辞の脱落は、次のような要因と結びつけられ、説明できるのではないと思われる：すでに述べたように、単文の「純伝聞」(narrative) の場合は、繫辞が省かれるという法則が一貫性を保っている。上記の例 (38、39) の繫辞の脱落も、単文のこの法則に従い、「伝聞の視点」が文末まで貫かれていることを意味すると考えられる。Fielder⁽⁵⁷⁾ の叙述を借りて言えば、繫辞が省かれる形式は「登場人物の視点」

52 Пелин Е. Разкази. София, 1975. С. 70.

53 Бояджиев и др. Съвременен. С. 420 にて引用。

54 Пелин. Разкази. С. 304.

55 Пелин. Разкази. С. 138.

56 Пелин. Разкази. С. 222.

57 Fielder, "Distance," p. 221.

(‘perspective of the character’) から出来事を伝えているということである。

また、統語上の役割により、繫辞が保有されることがある(40)。このような場合には、繫辞は統語的曖昧さを排除する。

(40) *Иван каза, че си е купил нова стихосбирка.* (Friedman : 1982 による例)

イヴァンは、自分に新詩集を買ったと言った。

(40)には、再帰助詞 (*си*) が用いられており、この助詞は、二人称の繫辞と同形である。従って、繫辞が脱落すれば、文は二人称か三人称か、曖昧になる (cf. 41)。

(41) *Иван каза, че си купил нова стихосбирка.*

- a. イヴァンは、自分に新詩集を買ったと言った。
- b. イヴァンは、あなたが新詩集を買ったと言った。

また、従属節の主語が、補語として主節に現れる場合 (例 36、‘*i*’) は、繫辞が残った方が自然である。

単文では「伝聞」を表す *-л* 分詞は、暗示的に「不信」や「不満」を表し得る。従属節の *-л* 分詞にも同様な働きがある：

(42) *Обичала си ме още, викаш.* (Е. Пелин)⁽⁵⁸⁾

あなたは、まだ私のことが好きだと言っています。

不信・不満の意味が明示されることもある。単文と同様に、*-л* 分詞に *бил* 補助動詞が付加されることによって、「不信」や「不満」の意味が形式上明示される：

(43) *Казва, че имал бил пари.* (Й. Йовков)⁽⁵⁹⁾

彼はお金があるって言っているが (、本当かな)。

(44) *Обвинявате ме, че не съм бил работел.* (Й. Йовков)⁽⁶⁰⁾

私が仕事をしないとあなた方は言っているが (、違うと思います)。

主節が推量の意味を表す場合に関しては、*че* と *да* の双方の接続語の可能性を検討した。主節の述語が「告知・引用」の動詞である上記の全ての例では *че* が用いられているため、次に *да* との共起の可能性 (そして、その条件) について記述する。まず、次の例を見られたい。

58 Пелин. Разкази. С. 60. *викаш* は *казваш* の意味で用いられている。この文は、「あなたは私のことが好きだと言っているが、私は信じない」ということを含意する。

59 Герджиков. Една специфична. С. 49 にて引用。

60 Герджиков. Преизказването. С. 19 にて引用。

(45) *Каза му да дойде.*
彼に来るようにと彼は言った。

(46) *Каза аз да дойда.*
私が来るようにと彼は言った。

(47) **Каза му да ще дойде.*

(48) **Каза му да дойде*⁽⁶¹⁾.

(49) **Казах му да дойда.*

上記の例から次のことが言える。まず、*да* が共起できるのは現在形のみである (45、46)。また主節の動詞 (*каза*) の主語と従属節の主語は異なる人物でなければならない。

次に、*-л* 分詞の間接的命令の用法について検討する：

(50) *Какво каза ли? Каза да сме идели*⁽⁶²⁾ *тази нощ в Сърнено.* (Й. Йовков)⁽⁶³⁾
彼は何と言ったか。今夜、我々がサルネノへ行くように言った。

(51) *Придумва ме да съм идем с него в Търново.* (А. Страшимиров)⁽⁶⁴⁾
彼と一緒にタルノヴォへ行くようにと私を説得している。

(50)と(51)が示しているように、*да* は *-л* 分詞の節と共起できる。すなわち、ブルガリア語では、命令の間説法は可能である。これらの文を単文に置き換えると、次のようになる。

(50') *Да сме идели тази нощ в Сърнено.*

(51') *Да съм идем с него в Търново.*

このような用法をもとに、Маслов⁽⁶⁵⁾は '*преизказан конюнктив*' (「伝聞の従属法」) というカテゴリーを区別するが、Масловと同様にこの形式のカテゴリー性を認めている研究者は少ない。

(50)や(51)が示しているように、*да* は *-л* 分詞の節と共起できるが、共起の際に、特定の制約は働く。まず、次の文を見られたい。

61 (48)の *дойде* はアオリストである。

62 *идели* は *отидели* の意味で用いられている。

63 *Демина*. Пересказывательные. С. 330 にて引用。

64 *Демина*. Пересказывательные. С. 330 にて引用。

65 *Маслов*. К вопросу. С. 260.

(52) **Каза да дошъл.*

(53) *Каза да дойдел.*

(52)と(53)の従属節の動詞 (*дойда*) は同じであるが、分詞の形が異なる。(52)の分詞は Aorist 分詞であり、出来事の完結を表している。一方、(53)の分詞は Imperfect 分詞であり、不完了性を表している。(53)が可能であるのに対して(52)が不可であるということの要因は、分詞のタイプにあるとみられる。すなわち、*да* は Imperfect 分詞の節とは共起できるが、Aorist 分詞の節とは共起できない。*да* とテンス形式の共起を考察した際に述べたように、*да* に次ぐ節の動詞は現在性 (または不完了性) を表さなければならず、Aorist 分詞には不完了性という意味特徴がないため、共起は不可能になると考えられる。(33')と(52)を比べると、(33')は文法的であるが、(52)は非文法的である。また、(53)の接続語を *че* に置き換えると (**Каза, че (е) дойдел*)、非文が発生する。完了体の Imperfect 分詞 (*дойдел*) はモダリティ性が高く⁽⁶⁶⁾、主節には現れず、従属節、しかもモダリティ性の高い従属節 (仮定節など) にしか現れない。

「伝聞」を表す *-л* 分詞は、「告知・引用」の動詞のみならず、「伝聞」を含意する様々な表現/動詞をもつ主節にも従属できる (54, 55) :

(54) *Само от време на време достигаха⁽⁶⁷⁾ в село тъмни слухове, че се пропил, че станал лош. (E. Пелин)⁽⁶⁸⁾*

時々ではあるが、村には、彼が飲んだくれになり、悪者になったという噂が届いていた。

(55) *Когато се разнесе из селото новината, че дядо Матейко починал, никой не повярва. (E. Пелин)⁽⁶⁹⁾*

村中に、マテイコおじいさんが死んだというニュースが流れたとき、誰も信じなかった。

2-2-2. その他の「伝聞」の複文

2-2-1 では、主節に「告知・引用」の動詞が用いられる複文を取り上げた。2-2-2 では、次の二つの構文を少し考慮したい。一つは、主節が直説法でありながら、従属節に「伝聞」を表す *-л* 分詞が現れる複文 (56, 57) である。もう一つは主節に「告知・引用」の動詞の代わりに「伝聞」を表す *-л* 分詞が用いられている複文 (58, 59, 60) である。この分析においては補語的従属節以外に他のタイプの従属節 (副詞的節、修飾節) の複文も取り上げる。

66 完了体の Imperfect の形式のモダリティ性について Aronson, “Interrelationships,” p. 25 が詳しく論じている。

67は主節の動詞を指し示している。

68 *Пелин*. Разкази. С. 275.

69 *Пелин*. Разкази. С. 119.

まず、主節が直説法でありながら、従属節に「伝聞」を表す -л 分詞が現れる複文からみてみたい：

- (56) *Кметът беше го изпратил от селото да повика снаха си, че⁽⁷⁰⁾ някакви стражари я дирели.* (E. Пелин)⁽⁷¹⁾
村長が、彼に嫁さんと呼びに村まで行かせた。それは、警察官が彼女を探していたということだった。

- (57) *Аз предложих на Бай Ганя една от книжките си, за да си съкрати времето с четене, но той любезно отклони предложението ми, защото бил чел достатъчно на времето.* (A. Константинов)⁽⁷²⁾
バイ・ガニョに、時間つぶしのため、自分の持っていた本を一冊読むように勧めたが、彼は、昔十分に読んだのだと言って私の勧めを丁寧に断った。

(56)と(57)は主節が直説法で、従属説が「伝聞」であるが、これらの節のモダリティの変化は「視点」の変化をもたらす。主節が話者(= narrator)の視点から述べているのに対し、従属節は主人公(= character)の視点から述べているのである。また、従属節が独自に「伝聞」を表している場合は、その意味が主節で補充されていないため、伝聞を明示するには、単文の narrative と同様に、繫辞の脱落(дирели, бил чел)が必須である。

次に、主節に「告知・引用」の動詞の代わりに「伝聞」を表す -л 分詞が用いられている複文の例をみてみよう。

- (58) *Когато на вратата се почукало, Иван тъкмо щял да излиза.*⁽⁷³⁾
ドアがノックされたとき、イヴァンは出かけようとしていたようだ。

- (59) *Млад Стоян войник отишъл и поръчал на своята вчера доведена хубава невеста, ако го обича, да не ходи на Гургульово кладенче за вода. Едвам Стоян се затулил и Стояница си спомнила за млад Гургул, с когото са се любили.* (E. Пелин)⁽⁷⁴⁾
若い兵隊のストヤンは、きのう連れてこられた美人の新妻のところへ行って、自分のことを愛すのであれば、グルグル青年の井戸には水汲みに行かないように言った。しかし、ストヤンの姿が見えなくなるや否や、ストヤンの新妻は愛し合っていたグルグル青年のことを思い起こした⁽⁷⁵⁾。

70 この文における *че* は理由を表し、*защото* の代わりに用いられている。

71 Пелин. Разкази. С. 44.

72 Константинов А. Бай Ганю. София, 1946. С. 6.

73 Герджиков. Една специфична による例。この文の主節と従属節の位置が入れ替わっている (*Иван тъкмо щял да излиза когато на вратата се почукало*)。

74 Герджиков. Преизказването にて引用。

75 ブルガリア語の *поръчал* の直訳は、「お願いしたそうだ」であるが、伝聞の形式の日本語がさほどよくないので、「言った」と訳しておく。

- (60) *Е, господин съдия, Господ направил света и пресметнал, че на жените брада не трябва, и не им дал.* (E. Пелин)⁽⁷⁶⁾
 さて、裁判官さん、神様は世界を創ったとき、女性にはヒゲが要らないと決めて、与えなかったのである⁽⁷⁷⁾。

主節に「伝聞」を表す *-л* 分詞が用いられている場合に、主節に「告知・引用」の動詞がある文と同様に、従属節の形としては *-л* 分詞以外の形式も許容される (59、60)。それは、主節の述語が伝聞の意味を明示するためである。

2-3. その他の機能

ブルガリア語の *-л* 分詞は、「推量」や「伝聞」などといった情報源に関わる機能以外に、情報源とは無関係の機能ももっている。出来事に対する話者の驚異や出来事との心理的距離 (回想、想起)、または話者の未知・不信・未確認・不関与などを表す機能である。複文の主節の述語がこういった意味を明示もしくは含意すると、従属節の述語が *-л* 分詞の形を取ることによって、「驚異」や「距離」または「未知・不信・未確認・不関与」などの度合いが強化する。

- (61) *Погледнах часовника си. Я гледай, (че/та) то било вече обяд!*⁽⁷⁸⁾
 時計を見た。なんと、お昼だった。
- (62) *Като си помисля с каква жена съм щял да свържа живота си.*⁽⁷⁹⁾ (П. Славински)
 どんな女と自分の人生を結ぶところだったかと考えるだけで (怖い)。
- (63) *Оказва се, че той не е знаел английски, а ние му вярваме.*
 彼が英語を知らないことが判明したが、我々は彼を信じていたんだ。
- (64) *Така щото по едно време видях, че дружината ми отминала и се изгубила напред.*⁽⁸⁰⁾
 ある時、仲間が通り過ぎて遠くへ行ってしまったことに気付いた。

76 Пелин. Разкази. С. 114.

77 前例文の日本語訳と同様に、直訳せず、「～た」形で訳しておく。

78 *е обяд* という形を使ってもよいが、前提が違う。*-л* 分詞の用法によって発話時における話者の気付きが、発話時以前の話者の何らかの意識的状态 (「まだお昼ではないはずということ」と対比させられているという意味合いが生じる)。

79 *Бояджиев и др. Съвременен* にて引用。*-л* 分詞の用法が、もう少しで起こるところだった出来事の「意外性」を導かせる。

80 L. Andreichin, *Kategorije Znaczeniowe Koniugacii Bulgarskiej* (Krakow: Polska Akademia Umiejtnosci, 1938) による例。

-л 分詞の主観性が文全体に主観的ニュアンスを加えている。主観性が感じられない次の文と比較されたい。

Дядо Захари видя, че слыцето вече заседна и хората по тътя намаляха. (E. Пелин)
 「ザハリおじいさんは、日が暮れ、道にいた人が少なくなったのを見た。」

- (65) *Гледай, гледай какъв човек е бил тоя дето е написал тази книжка!*⁽⁸¹⁾
この本を書いた人はなんとこういう人だったんだ。

また、-л 分詞の使用によって、話者の確信を表している動詞 (*кълна се* 「誓う」、*залагам си главата* 「首を賭ける」) は、「確信」の度合いが薄くなり、主観的意味合いを帯びる。

- (66) *Кълна се, че е знаел, но не е казал.*⁽⁸²⁾
彼が知っていたのに言わなかったのだ、と私は誓う。

- (67) *Залагам си главата, че в това време Петър се е криел в училището.*⁽⁸³⁾
その時ペタルが学校に隠れていたと首にかけて誓ってもよい。

3. -л 分詞と ‘knowledge/belief’

認識的モダリティの意味ドメインの特定を巡る議論の一つは、このタイプのモダリティが「知識」か「信念」のどちらの概念により強く依存するかということに関するものである。Lyons⁽⁸⁴⁾に従えば、「*X* knows that *p*」ということは「*X* believes that *p*」(i. e. *X* takes *p* to be true) ということを含意し、また話者に *p* の真実性を信じさせるが、「*X* believes that *p*」ということは話者を真実性にも不実性にも関与させない。すなわち、‘believe’ より ‘know’ を使用した場合の方が、話者の関与 (commitment) の度合いが強い。‘know’ または ‘know’ と同じように機能している用言は ‘factive predicator’ と呼ばれ、‘believe’ のような用言は ‘non-factive predicator’ と呼ばれる⁽⁸⁵⁾。一方、Akatsuka⁽⁸⁶⁾は、日本語の分析をもとに、‘knowledge’ について次のような興味深い観察を行っている。すなわち、「知る」という動詞が新情報の意味を表している場合に、通常取らない「と」という助詞 (complementizer) と共起できるということである。

認識的モダリティの形式の働きには言語普遍的なものと同じ言語特殊なものもあるので、次に ‘знам’ (「知る」) と ‘вярвам’ (「信じる」) を例に -л 分詞の振る舞いを若干検討したい。まず、次の文を参考されたい。

- (68) *Знам, че е направил това.*

- (69) **Знам да е направил това.*

彼がそういうことをしたことを (／と) 知っている。

81 Стоянов С. Граматика на българския книжовен език. София, 1964 による例。

82 *кълна се* という動詞が用いられているにもかかわらず、出来事の「真」は不確定である。

83 Герджиков. Препреказването. による例。(66)と同様に、出来事の「真」は不確定である。

84 J. Lyons, *Semantics* (Cambridge: Cambridge University Press, 1977), p. 794.

85 P. Kiparski and C. Kiparski, “Fact,” in M. Bierwisch and K.E. Heidolph, eds., *Progress in Linguistics* (The Hague: Mouton, 1970), pp. 143-173.

86 Akatsuka, “Conditionals,” p. 631.

знам は、‘factive predicator’ であるため、話者の不確定を含意する形式とは共起できないはずであるが、共起可能な場合 (68) がある。これは、Akatsuka の次の考察をもとに説明できると思われる。日本語の条件表現の多義性 (conditional/temporal) を巡って、Akatsuka⁽⁸⁷⁾ は次のように述べている： ‘the speaker’s attitude toward the state of affairs expressed by the antecedent determines whether the particular statement is conditional’。ブルガリア語の有繫辞の Aorist 分詞 (現在完了形／不定過去形) も多義的であり、「推量」以外に、アスペクト的意味、すなわち「結果状態」を表すこともある。(68) の *знам* は、この後者の意味の読みを引き出しており、このような表現を可能にすると考えられる。一方、(69) のように従属節の出来事が「真」であるという前提がない場合 (従属節が非現実性を表している場合) は、*знам* の用法は不適格である⁽⁸⁸⁾。

знам に比べると、*вярвам* の方は主観性が高いため、*да* 節との共起は可能であるが、話者の「信念」のみを表しているため、(72) のように伝聞の形式とは共起できない。また、(70) と (68) を比べると、(70) においては出来事の「真」は未確定である。

(70) *Вярвам, че е направил това.*

(71) *Вярвам да е направил това.*

(72) **Вярвам, че/да направил това.*

彼がそういうことをしたと信じている。

次に、Akatsuka が指摘する「知る」の、「新情報」を表す場合の振る舞いを、ブルガリア語に関して検討してみたい。まず、(73) の例をみよう：

(73) *Едва сега узнах⁽⁸⁹⁾ (=разбрах), че ти си бил голям певец.*

あなたは歌が上手だと初めて知った。

この文は発話時における話者の発見、すなわち「新情報の獲得」を表している。一方、動作主が歌が上手だという事実が話者にとってすでに「真」であれば、(74) のようになる。

(74) *Знам, че ти си голям певец.*

あなたが歌が上手なことを知っている。

ところが、話者が知っていると言っていることを自分で信用していなかったり疑ったりする場合は、(75) のように、*знам* は「伝聞」や「不信」を表している *-л* 分詞の節と共起できる。

87 Ibid., p. 626.

88 「伝聞」の従属節を含んでいる *Знам, че направил това* も不可である。

89 ブルガリア語では、完了体の動詞の用法が必要である。

(75) *Знам, че не било хубаво да се подстригваш преди изпит.*
試験の前に髪の毛を切るのはよくないと知っている。

一方、主節が話者の「未知」または「不信」を表している場合は、従属節に話者の確定を明示する定過去形が使えない (76, 77)。

(76) **Не знам, че направи това.*

(77) **Не вярвам, че направи това.*⁽⁹⁰⁾

上記の例が示しているように、認識的モダリティの形式の用法は、話者の「知識の状態」に深い関係を持っている。認識的モダリティと話者の「知識の状態」の関係は、最近様々な研究⁽⁹¹⁾で指摘されている。

おわりに

本稿は、従属節の evidentiality について分析を行った。分析は次のことを示した。

まず、主節の述語が文全体のモダリティの意味をコントロールし、従属節には *-л* 分詞以外の形式も許容される。ただ、従属節には *-л* 分詞の形式が用いられたことによって、モダリティ性が強調されたり、付加的モダルなニュアンスが加わったりする。また、従属節のモダリティのタイプが主節のモダリティのタイプと矛盾すると、文が成立しない。基本的に主節のモダリティが従属節のモダリティを規定するが、従属節のモダリティ性が主節の動詞の意味を限定することもある。

次に、単文に関して指摘された evidential の機能の形式的特徴は、複文の従属節のレベルにおいては次のように現れている。「推量」は、単文と同様な形式によって表される。「伝聞」に関しては、単文の「伝聞」について定められたルールからの逸脱も見られるが、その逸脱には二種がある。一つは、主節の述語が「伝聞」を明示するため、従属節の三人称の繫辞の有無が任意となるものである。もう一つは、繫辞の有無によって「語り」の視点が変わったり、統語的曖昧さが排除されたりするということであり、非任意的なものである。

最後に、ブルガリア語の evidential の働きが、話者の「信念」を含んだより広い認識的ドメイン、すなわち話者の「知識の状態」にまで及んでいるドメインの働きに規定されることを論じた。

90 Friedman (“Admirativity and Confirmativity,” p. 13) は、(77)のような文が、ある条件のもとで可能となると指摘する。その条件とは確定の否定が不誠 (‘infelicitous, insincere’) であるということである。

91 T. Givon, “Evidentiality and Epistemic Space,” *Studies in Language* 6:1 (1982), pp. 23-49; Akatsuka, “Conditionals”; J. Bybee, R. Perkins, and W. Pagliuca, *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World* (Chicago: The University of Chicago Press, 1994).

Evidentiality of the Subordinate Clause in Bulgarian

YOVKOVA-SHII Eleonora

This paper deals with the evidentiality of the subordinate complementary clause in Bulgarian, focusing on the following problems. First, it investigates to what extent the formal features established for the functions of the evidential of the simple sentence are preserved at the subordinate clause level. Second, it examines how the modality of the main clause influences the modality (evidentiality) of the subordinate clause.

The functions of the evidential of the subordinate clause treated in this study are in accordance with the functions established for the predicate of the simple sentence, namely “inference,” “hearsay,” and “admirativity.” For every function, we investigate sentences which include an “evidential” verb as the predicate of the main clause and analyse the possible occurrences of the predicate of the subordinate clause. Since the analysis deals with the complementary clause, it takes into account the two types of conjunctions, i.e. “*che*” and “*da*,” and verifies the possible co-occurrences.

In the introduction we describe the formal/functional features established for the *l*-participle forms of the simple sentence. The first section briefly outlines the complex sentence types and conjunctive differences.

The first part of the second section deals with the inferential function. The analysis begins with sentences with an inferential verb in the main clause and tense forms, other than the *l*-participle forms, in the subordinate clause. It shows that, when the “*che*” conjunction is used, any tense form can be subordinate to the main clause with the inferential predicate. However, when the conjunction changes into “*da*,” none of the tenses is permitted.

Next, we analyse inferential sentences which have an *l*-participle predicate in the subordinate clause and show how they differ in meaning from those with non-*l*-participle predicate. The use of the *l*-participle inferential predicate in the subordinate clause instead of an indicative predicate adds additional aspectual meanings (resultant situation) or limits the meaning of the predicate of the main clause to certain meanings (inference from hearsay). This section also treats some “admirative” usages. Admirativity is discussed in detail in the third part of the second section. As for the formal features of the inferential *l*-participles in the subordinate clause, the analysis shows that they are preserved in the same way as those of the inferential in the simple sentence.

The second part of the second section deals with the “reportive/hearsay” function. One of the great disputes concerning the *l*-participle in Bulgarian is whether the omission of the auxiliary in the third person is a sufficient condition for distinguishing a paradigm with an invariant meaning of “report/hearsay.” We have shown that for the predicate of simple sentences auxiliaryless forms can express not only “report/hearsay” but also other functions (i.e. admirativity). However, “pure report” is usually expressed by the auxiliaryless form. This part of the study analyses the problem of omission/occurrence of the third person auxiliary of the predicate in the subordinate clause. The analysis shows that, due to the fact that the verb of the main clause makes the report/hearsay explicit, the auxiliary omission in most of the cases is optional. However, there are cases where the omission (or preservation) of the auxiliary has its own purpose, i.e. it distinguishes the tense of the participle (past or present), or eliminates syntactic ambiguity.

This part of the study also deals with sentences which have indicative form in the main clause, but evidential (reportive) form in the subordinate and shows that in these cases the *l*-form in the subordinate clause is always auxiliaryless, thus making “report/hearsay” explicit. This part of the

study also deals with sentences which have in the main clause an *l*-participle form for “report/hearsay” instead of a verb for “report/hearsay.”

In the same section we also investigate the behaviour of the two conjunctions, i.e. “*che*” and “*da*.” Like inferential sentences, for “*che*” there are no constraints. “*Da*” clauses are possible only with predicates in the present tense. Besides, for complex sentences with “*da*” clauses, the subject of the predicate of the main clause and the subject of the predicate of the subordinate clause should be different. However, unlike the “inference” sentences, “report/ hearsay” sentences can contain *l*-forms in their subordinate “*da*” clauses. Consequently, “imperatives” can be reported in Bulgarian.

The third part of the second section briefly outlines the functions of the *l*-participle which have nothing in common with the “source of information,” or evidentiality, per se, i.e. “admirativity,” “disbelief,” etc.

The third section deals with the relationship of epistemic modality to the notions of “knowledge” and “belief.” This section analyses complex sentences with a “knowledge/belief” predicate in the main clause and investigates the behaviour of the subordinate clause predicate and its formal features. It shows that the speaker's attitude toward knowledge expressed by the predicate of the main clause determines the choice of the type of predicate or its meaning in the subordinate clause.

The final section summarizes the results of the analysis.